

誰が言ったか

恋は

究極の

差

別である

novelabase

■第01話

ファーストフードは落ちつかない。

インテリア、メニュー、サービス、集まる世代、とにかくすべてが肌に合わない。

とくに、これは、という店を見つけてしまった者にとっては、ファーストフードは妥協でしかない。

「じゃあ、どこにする？」

「ねねね」

変わっているが、それが店の名だ。切り株を模した看板に、ひらがなで、なぐり書きにしてある。

「なにそれ」

「おれんち来る途中にケーキ屋あったじゃん、その隣の喫茶店」

「へー、そんな店、できたんだ」

いや、目立たないだけで昔からある。マスターとはかれこれ5年以上の付き合いだ。

「で、もうじき着くから、切るぞ」

というか、着いた。窓越しに店内を見ると、マスターがボケッと突っ立っている。

「オッケー、じゃ後で」

「おう」

ドアを開け、カランコロンを鳴らすと。

「ああ、亮ちゃん、おかえり」

マスターの顔が、みるみるほころんで。

「遅くまでタイヘンね、今日も残業？」

「へ？」

いや、遅くもないし、仕事は先週辞めたし、就活中だと昨日伝えたばかりだが。

「なにそれ、皮肉？」

「帰宅した息子をねぎらうのは母の務めよ」

「そんなこったろうと思った」

「ママって呼んでもいいのよ」

「それだけは絶対ヤだ」

「ハハ、まあ座りなよ」

マスターは、わざわざ店の奥を一瞥して、次に窓側を見た。

「いつもの席より、今日はこっちのほうがお勧めなんだけど」

「わかってるよ」

奥のボックスには先客がいて、なにやら書き物をしている。ようするに、邪魔をしないよう、距離を取れというのだろう。

「しゃーない」

この時間の窓際は、夕日が眩しいから、あまり座りたくはないが。

「ご注文は？」

「うーん、そうだな」

ただ今日は、ヤツが来た時、店に気がつかずに通り過ぎてしまわないよう、むしろこっちのほうがいいのか。

「ところで、五丁目の本多くん、彼女できたの知ってる？」

「いや、知らんけど、なに、いきなり」

「家に挨拶に来たんだってさ、お母さん、喜んでたわあ」

「で、なに？」

「亮ちゃんも、彼女ができたら、ママに紹介してね」

「はあ」

やっぱりか…………アホくさ、ここはスルーしよう。調子に乗せるとキリがない。

「知り合い来るから、それまでとりあえずアイスコーヒーかな」

「ママは、いつだって、あなたのことを心配してるのよ」

「それから、ネットするから、ルーターオンにしてくれる？」

さあ、どう出る。マスターは一瞬固まって。

「飽食の時代だね、今日もジョークが無駄に消費されていく」

そして、十字を切って嘆いて見せたが。

「主よ」

まったく、始終ふざけていないと、気がすまないらしい。

「いいから仕事しろよ」

「仰せのままに、ネロ様」

「誰だよそれ」

おかげで、こちらも気兼ねしないでいられるが、あまり自由すぎるというのも考えもの。

やっと、カウンターに戻ったマスターは。

「えっと、ホットチョコだっけ？」

「冬か」

自分も飲むつもりなのか、グラスを二つ取り出したが。

「私はなににしようかな」

それをカウンターに置こうかというときに、窓側をチラ見したかと思うと、今度は、あごを一回二回と突き出して。

「亮ちゃん」

見ろってことか。振り向くと、誰か外から窓を叩こうとしていて。

「あ？」

こちらと視線が合ったのを確認すると、手を止めた……が、誰だ、この女。

「は一ん、知り合って、女の子なんだ」

「いや」

「とうとう、彼女、できたのね？」

「だから、違うって」

待ち合わせているのは男で、昔よく遊んでいたヤツで、この場所で、このタイミングで、こんな親しみのこもった顔をするとすれば、そいつの筈だったが、今、目の前にいるのは、まったく知らない女だ。

「ぜんぜん知らないひと」

なんだか恥ずかしくなって目をそらそうとすると、彼女は窓から離れて……これは、店に入ってくるつもりには違いない。

偶然にも、別の知人がもう一人現れたという可能性はあるが。

「亮一」

それにしても誰だ。店に入ってくるなり、彼女は耳慣れた名前をピタリ言い当てた。しかもかなり親密な呼び方で。

「えっと、あの」

こちらは彼女に関する記憶が出てこない。

「どちら様でしたっけ」

聞くと、彼女はズカズカと目の前を横切って向かいの席に座り。

「あははははははは」

そして笑った。この事態を解明するには、彼女の言動を見守るしかないが。

「よし完璧」

そう聞いては、ますます困惑する。いい加減に正体を明かしてほしい。

「あーもう、オレだよ、オレ」

が、彼女はなにか、凄いことを言ったような気がする。

「は？」

待ち合わせているのは男で、昔よく遊んでいたヤツで、この場所で、このタイミングで、こんな親しみのこもった顔をするすれば、そいつの筈だったが、今、目の前にいるのは、まったく知らない女だ。

「ほら、牧島悠、ビックリさせようと思ってさ」

それはよく知っている名前で、さっきケータイで話していたヤツで、ここで会う約束だったが、今、目の前にいるのは。

「私、ニューハーフになっちゃった、テヘ」

まったく知らない女だ。

■第02話

彼女がテーブルを叩いた。

「そんな顔しないでよ、今どきニューハーフなんて珍しくもないでしょ」

「そ……………だよな」

とは言ってみたものの、動揺がおさまらない。

「ケータイでは普通に喋ってたじゃん」

彼女が……………いや彼が、ニューハーフになったことは理解したが、ガキだったころの記憶の中にいる彼を思うと、どう対応するにも抵抗がある。

「ご注文をどうぞ」

「アイ스티ーで」

エアガンで打ち合いしたり、万引きしたり、エロ本をまわし読みしたり、あの頃の面影は少しもない。見れば見るほど、むかしのよう気楽に会話できそうにない。

「あ、やっぱり、ジャスミンティーで」

だって、メチャクチャ可愛くなっている……………顔のパーツ、一つ一つが美しく、配置のバランスも絶妙で。

「へー、あるんだあ」

「趣味でさ、自分の飲みたいものや食べたいものをメニューにしてんの」

長い髪はサラサラしていて、小顔で、首が長くて、胸も、ウエストも申し分ない。

「なんか私と店長、気が合いそう」

「まー、カワイイこと言うわね、娘にしたくなるわあ」

足は、今はテーブルに遮られていて見えないが、さっき店に入ってきた時はどうだったか……………よく覚えていないが、さして期待を裏切るところはなかったような気がする。

「店長って、亮一と仲いいんですね」

「ああ、わかる？」

横顔も愛くるしく……うん、これはもう上玉と言っていいだろう。

「さっき窓から見てたら、そんな感じだったから」

「そうねえ、もう長いつきあいよねえ、亮ちゃん、あら、なんか見とれてるよ、やらしー」

でも、こいつは生物学的に♂なのだ。知らないマスターの無邪気さが腹立たしい。

「いや、久々に会ったから、すいぶん変わったと思ってさ」

ところでニューハーフは、その正体を軽々しく暴露されたら、どう思うのだろう。

「こんなにキレイになってるとは思わないじゃん」

ここは、とりあえず誤魔化すことにしよう。

「あの、店長、さっき亮一には話したんですけど、私、オカマですから」

取り越し苦労か、意外にもあっさりカミングアウトしやがった。しかも、オカマになっている。

「え、ドン引きしちゃいました？」

さっきまではニューハーフと自称していたのに、わざわざ変えた。オカマとニューハーフの厳密な違いは判らないが、感覚的に同じものではないような気がする。

「あのう」

「ははは、なーんてウソウソ、冗談よ」

「あービックリした」

「そんなのどうせ人間の一種でしょ、なんだっていいわよお」

「うーん、それはそれでプライドが傷つくというか……」

「そうやって傷ついたところを慰めてれば、いつのまにか私の娘になっちゃうかも？」

「えーと」

「あはははは」

「あーもう、店長だい好き」

外見は、女だと言われたらそのまま信じてしまいそうだが……現に最初はそう思ったし、言動も

女そのもので、オカマと言われると、かえって違和感を覚える。

「ほんと可愛いね、あなた、えーと名前は？」

そんな容貌とは裏腹に、本人は自信を持っていないとか。

「悠です」

「ゆうちゃんね、おっけー」

あるいはマスターの年齢に合わせて昭和語に翻訳したとか。

「ふつつか者ですが、よろしく願いしまーす」

「こちらこそねー」

わからないが、いずれにしても、そこには何らかの処世術が感じられる。

お互いにもう、子供ではない。

「亮ちゃんは私のことマスターって呼んでるけど、ゆうちゃんはママって呼んでね」

「はーい、ママ」

あれこれ考えているうちに、対岸では母娘の絆が芽吹いたようだ。

「うれしいな、亮ちゃんはさ、いまだにママって呼んでくれないんだよ」

「場末のスナック来たみたいでヤなんだよ」

「あらら、亮ちゃんはウチに高級クラブを期待してるの？」

「そーゆーことじゃねーだろ」

「さすがにこの歳じゃホステスはもう無理ねえ」

「だから違うっつーの、こちとら水商売なんて求めちゃいないし、若かったらホステスいけるよ
うな口ぶりもおかしいし」

「やだなあ亮ちゃん、ジョークよ、ジョーク」

「マスターが言うとジョークにゃ聞こえねーんだよ」

「あはははは」

それはそうと、牧島の様子がおかしい。急に静かになったと思ったら、チラチラ店の奥の方を気にし始めて。

「ちょっと化粧室行ってくるね」

「あ、あそこの扉ね」

「はい」

なるほど、そういうことか、てっきり奥の席を陣取っている一見客を見ているのかと思った。

「あ、そうだ、注文ジャスマンティーだっけ？」

「はい、そうです」

トイレに向かう牧島の後姿は、やはり女にしか見えない。

ようやく足も拝めた。今もって膝下まで隠れてはいるものの、スラッと伸びたふくらはぎと、細く引き締まった足首から想像するに、スカートの下にはきっと凄い美脚を忍ばせているに違いない。

「そんで亮ちゃんはホットチョコだよな」

「だから、冬か、って」

「アハハ」

美脚のさらに奥のモノを連想すれば、ホットが欲しくなるくらい寒気がするのかもしれないが。

■第03話

この時期に転職するのは間違いだ、就活するにも暑くてたまらん。

もう7時だというのに空はまだ明るいし、熱気と湿気が体にまとわりついて気持ち悪いことこの上ない。

その上、折からの不況で雇用は激減している。

甘かった。あれこれ贅沢を言わなければ何かしら見つかるだろうとタカを括っていたが。

「亮一」

最悪バイトするしかない。

「亮一てば」

見ると、その最悪を選んだヤツが走ってくる。暑いのに元気なことで。

「よお、バイトはどうした」

「ん、ママに頼まれてちょい仕入れ」

しかし、マスターも思い切ったことをする。この世知辛い御時世に人件費もバカにならないだろうに、ちょっと可愛いからという理由で、客の知人を、しかも異常性癖の持ち主を雇おうなんて正気の沙汰じゃない。

「仕入れって、それ、スーパーだよな」

「うん、今日のメニューだっさ」

「いいのかそれで」

さらに驚いたのは同居を勧めたことだ。こいつは遠慮してアパートが見つかるまでと期限をつけたが、ねねねに泊り込んで既に一週間は経っている。

「ところで」

ところで、何故こいつは里帰りしたのだろうか。これは聞いてはいけない部分だろうか。

「この街もだいぶ変わっただろ」

「そうだねー、駅の南側がロータリーになってて驚いたよ」

ダメだ……昔なら躊躇なく聞けたろうに……やはり外見に翻弄される。

「ちょっと」

次の会話が見つからなくて口ごもっていたら、突然シャツを引っ張られた。

「あ？」

「こっち来て、亮一」

牧島はデパート脇の路地を小走りに進んで行く。長い髪からはほのかな香りが漂って。

「こっち」

良い香りなのか悪い香りなのかは、わからない。いや、それはともかく、牧島は、路地から出ると。

「おい」

表通りに向かおうとするが、そっちは、ねねねとは逆方向だ。

「いいから早く」

こちらの懸念は承知とでも言わんばかりにグイグイ引っ張る。一体どこへ、そして何故そんなに急ぐ必要がある。

「ミセス・バーガー？」

ファーストフードは嫌いだというのに、それに夕飯にもさし障る時間だし、こんなところに入りたくない。

「いらっしゃいませ」

店員の声も無視して注文もせずに二階へと上っていく。おいおい、牧島悠、それは非常識だろう。

「すみません、席を取ってから注文します」

「ごゆっくりどうぞ」

そんな尻拭いをせねばならない不条理に悶々としながら階段を上がると……牧島は窓際にいたが。

「おい」

席に座るでもなく、こいつは何がしたいんだ。

「ここでお茶してこう」

そう言いながらも牧島は窓の外を見ている。まるで誰かを探すかのように視線を泳がせて。

「よし、私ジャスミンティー」

それで納得したのか、ようやく席に着いたが。

「おれに注文してこいて？」

「ごめん、行ってきて」

まったく、なんというワガママ。

「しゃーねーな」

こいつが普通の女なら、優しい男を演じるのもやぶさかではない。いや、顔も可愛いし、スタイルも抜群だし、これが本当の女だったら、むしろ無理難題を聞いてやりたい。

「ご注文をどうぞ」

「ジャスミンティー2つ」

と言うか、ねねねじゃあるまいし、ここにはそもそもジャスミンティーなんて置いてないだろう。

「かしこまりました。少々お待ちください」

あるらしい……あいつ、常連だな。

「ジャスミン、ツー入りましたあ」

それにしても、たかだかジャスミンティーを飲むために、あれだけ不審な行動を取りはしまい。

「お会計、420円になります」

あれは、追っ手をまく挙動と一致する。

「お待たせしました、こちらジャスミンティーになります」

「どうも」

「ありがとうございましたあ、ごゆっくりどうぞー」

路地を抜けて、追っ手の死角に入ったところで、近場の店に逃げ込んだと考えれば合点がいく。

何故、牧島は故郷に帰ってきたのか……疑問が再燃する。先ほどの逃走劇と何か関係しているのだろうか。

隠していた素性がバレて会社をクビになったとか、ベタなところだとそんな推測ができる。

「ごめんね、あ、210円でしょ、払うよ」

いや、それだけでは逃げる理由にはならない。

「たりめーだ」

ほのかな香りが漂っている。ジャスミンではなく、ミステリアスやラブロマンスのそれでもなく、ニューハーフの香りだと言うところが、哀しくも冷たい……いやいや、暑苦しい現実だ。

■第04話

失業保険が下りるまで貯金が持ちそうにない。ならば喫茶店でメシを食うような贅沢は避けるべきだが、外出すれば、その行き帰りはここを通ることになる。

外出せずとも、それはそれで侘しいものだ。テレビを見ても、ネットを彷徨っても、何か満たされない。人恋しくなって、ついついここに足が向く。

そんなありきたりな理由ならいくらでも思いつく。

牧島の真意を確かめたくて来ていると思われたくない。

店を覗くと誰か先客がいる。よく見ると以前に奥の席を先取りしていたヤツだが、今日はカウンターに座っている。

日を改めるべきか。

マスターがこちらに気づいて手招きした。牧島は客と談笑中の様子で、込み入った会話はできそうにないが、しかたない、もう迷ってはられない。

「ちーす」

「こちらはボックス席の背もたれが高くデザインされていますね」

ドアを開けて聞こえてきたのは女の声だった。なんだ、この客、ツンツンに尖った茶髪だし、スーツを着ているから、今どきのチャラ男だとばかり思っていたが。

「この高さがあるから、ちょっと気をつければ周囲に自分の挙動を知られずに済みます」

これはどう聞いても女の声だ。

「逆に騒ごうとすると、この背もたれに遮られて努力が報われないかもしれません」

牧島と同じニューハーフという可能性もあるが、類が友を呼ぶ偶然も、この短期間ではちょっと考えにくい。

「静かにするのに有利で、騒ぐのに不利と言えます」

いや、オトコのような女と、オンナのような牧島、その絶妙な組み合わせも、出来すぎた偶然と言えなくもない。

「このようにデザインが店の適正音量を要求している場合があります」

「あーそういうことなんだあ、だから、静かなお客さんが多いのかな」

それにしても、牧島の声は実に見事にオンナを演出している。

「なんか、話しかけないでって感じの」

「わざわざ喫茶店にいらっしゃるお客さんの中には、静かに一人の時間を過ごしたい方も多いでしょう」

最初にケータイで話したときは、久しぶりなこともあって、そんな変声もあるものと受け流していたが、こうやって直に比較してみると、このスーツ女に負けてない、澄んだ声だ。

「しかし、だからと言って、コーヒーの味を疎かにして良いわけではありません」

奥の席は空いている。スーツ女はなんだか堅い話をしていて、邪魔してはいけない雰囲気だし、このまま静かに通り過ぎよう。

「亮ちゃんココに座りなよ」

が、呼び止められた。こことは、スーツ女の隣のことだろうか。

「運ぶのめんどくさいから」

「そんな理由かい」

馴れ合いのずさんな扱いには慣れているが、それにつけても、この堅物スーツ女の隣に座るのは、何やら負担を感じる。

「うそうそ、亮ちゃんにも聞いてほしいのよ」

「そうなの？」

聞いてどうなるものなのか。

「ちょうど今、コーヒーの入れ方を教わってたところなんだ、だからさ、ほら」

何が丁度なのかよく判らないし、コーヒーの淹《い》れ方も知らずに喫茶店などやってはいけないし、語尾の「だから」にも何の説得力もない。

しかし、それが話を断る理由になるわけでもない。

「どうも」

もう観念するしかないだろう。

「こんにちは」

スーツ女はこちらを向いて、余裕たっぷりに笑って見せた。ここは順当に、自己紹介とか、面倒な儀式を一通りやらねばなるまい。

「もう少しフィルターと距離をあけて」

だが、スーツ女の視線はすぐにマスターの手元に移った。

「お湯は淀みなく注いで、かつ、豆があばれ過ぎないように」

「回しながらね、ああ、こちら村野さん、そっちはさっき話してた亮ちゃん」

既に話題にされていたらしい。ならば儀式も無用、どんどん省略していこう。

「で、その話ってのは」

「まあ、その前にひと息ついて下さいな」

まるでこちらの拙速をたしなめるかのような対応……なんだろう、このスーツ女の一言一言が、慣れ親しんだ店を敵地のように感じさせる。

「はい、どうぞ」

「あん？」

そのアウェー感に加え、注文もしていないコーヒーを差し出された。

「砂糖もミルクも入れないで、とにかく飲んでみて」

それどころか、向こうから注文を連発してくる。マスター、立場が逆だろう。

「塩も醤油も入れないで、さあ飲んでみて」

とどめにクソ面白くもないジョーク。普段は他愛もないマスターの戯れも、このスーツ女と組み合わせると、如何《いかん》ともしがたいストレスに変わる。

「どう？」

「どうって、まったくしていて、それでいてしつこくない、とか言ってほしいわけ？」

なんとなく意図はつかめたが、期待されても困る。

「いや、よくわかんないけど、コーヒーだとしか」

「うーん、つまんない反応だわね」

マスター、あんたにつまんないって言われたくない。

「やはりマニアではない、風雅さん、つまり客層の質が落ちたってことですよ」

このスーツ女はスーツ女で、初対面の者によくまあそれだけズケズケ言えたものだな。

「亮ちゃん出世しそうにないしね」

暴れてほしいか……出世どころか社会復帰も諦めるぞコラ。

「これは、趣味で固めたメニューの組み立てにも原因がありますよ。風雅さんの味覚に近いお客さんは定着するかもしれませんが、それ以外の客層の開拓は難しいと思います」

「弟がやってた頃の常連さんがだんだん来なくなったのは、そういうことなんじゃないかって、そんな気はしてたんだけどねえ」

「店舗レイアウトや以前のレシピを見る限り、間違いないと思います。弟さんは市場の傾向をしっかり把握していらしたようですし」

何の話だよ。そこに参加する意義があるとは到底思えない。

「だからチェーン店がひしめき合うこの界限でもそれなりに通用していたんだと思います」

アウエーの中、ふと、牧島と目が合った。

「亮一、おなか減ってるでしょ」

それを待っていたかのように牧島は話しかけてきたが、おまえは敵か味方か、どっちだ。

「なに食べる？」

「じゃあ、塩スパゲティ」

いや、それはどうでもいい。ここに来た当初の目的を思い出した。

「よーし、すぐ作るから、待っててね」

「おう」

こんなに普通に会話していて良いものなのか……………ミセスバーガーの一件以来、こいつにどう接したらよいか考えあぐねている。

□第05話

ミセス・バーガーの喧騒にも増して、牧島の行動は鬱陶しい。

誰かが階段を上がってくる気配があると逐一そちらをチェックしている。それに、ときどき窓の外を覗き込んだりしているし、やはり何かを警戒している様子だ。

「私さあ」

追求しないでおいてやることもできるが、まあ、これだけ挙動不審ならコイツも弁解しないわけにはいかないだろう。

「追われてるんだよ」

そうだろう、そうだろう、問題はその先だ。

「おしまい」

「なんじゃ、そりゃ」

それではスキヤキに肉が入っていないし、仏を造っても魂が入らないし、なんと言うか、うまい喩えが思いつかないほど説明不足だろう。

「あのねえ、謎をふっかけておいて答えを言わないのは失礼というものだよ」

「聞きたい？」

なんだ、こいつ……嬉しそうに目を輝かせて、そんな可愛い顔したってニューハーフだという事実は今さら消せない。

「人が心配してるのに、その態度はないだろ」

「わあ、お父さんみたい、アハハ」

そのお父さんは、手塩にかけた息子がこんな姿に変わり果ててしまっ、今ごろ泣いていることだろう。

「そう言えば、お」

「死んだよ」

こちらがまだ言い終えないうちに答えが返ってきた。早押しクイズじゃあるまいに、聞き終わる前に設問を全て読みきったとでも言うのか。

「お父さん？」

しかし……だとすれば、それは気の毒なことをしたかもしれない。

「うん、そう」

その後にかける言葉が見つからない。

「私ちょっと変わった子だったから、お父さん悩んでいたみたい」

つまり、自殺なのか……それは、返すがえすも悪いことをした。子供がニューハーフだとしたら、それはどんな親でも悩むだろうとは思っていたが、まさかそんな深刻な事態になっていたとは。

「お母さんも、相当困ったみたいで、ときどき泣いてた」

だけど、牧島は何故そんなディープな過去を笑顔で話すのか。笑顔というより今にも吹き出しそうな顔で。

「アハ」

むしろ、吹き出した。

「アハハハハ、亮一、真面目すぎ」

「って、ウソかよ」

これはたぶん、怒ってもよい場面なんだろう、不謹慎も甚だしい。

「アハ、お腹いたい、アハハ」

ただ、憤りよりも疲労感のほうが大きい。こいつの言うように、真面目に相手をしたら損だ。

「でもね、追われているのは本当」

こいつの本当は、本当に、本当なのか、何の保障もないと考えたほうが良い。

「私、つい最近ね、劇団のオーディション受けたの」

女と見せかけて実は男だった、というトリックに既に一度騙されている。

「そしたら受かっちゃって」

その教訓を活かすなら、こいつの話は、もっと慎重に精査せねばなるまい。

「一応これでも期待されてるのね」

たとえば、ニューハーフが期待される劇団とはなんだ、一体どれだけの想像力を要求するつもりなのか。

「だから気をつけてくれって言われてるの」

寒気がするほど努力したってホニャラ塚のマンウー逆転バージョンしか思いつかない。

「マスコミとかに色々書き立てられないようにって」

話が無理があるから、聞く側にそんな消化不良を起こさせる。

「追われてるってのは、そういうこと」

だいたい、ねねねの件はどう説明するつもりだ、これから売り出そうって人間が茶店でバイトなんてするもんか。

「さっきも、誰かに尾行《つけ》られてるような気がしてさ」

それだって怪しい……さっきの路地裏のサスペンスですら、お芝居だった可能性がある。

「まあ、メイクも落としてるから、気づかれないと思うし」

罨というものは、まさかと思うところに仕掛けてこそ意味がある。

「気づかれても、一人なら、なんてことないんだけど」

今もこいつは吹き出すタイミングを窺っているのかもしれない。

「亮一と、その……………一緒だったから、うん、なんだか慌てちゃって」

まったく、いつからこんな狼少年……………もとい、狼ニューハーフになってしまったのか、年月とやらに中指を立てたくなる。

「聞ってる？」

「ああ」

とは言え、もう真面目に聞くつもりはない。

「本当はね、亮一に会うの、少し怖かった」

何を聞かされたって、もはや信用することはできない。どうしたって疑念は拭えない。

「でもね、後悔したくないから」

拭えないが……………その寂しそうな笑みと、うっすら潤んでいる瞳には、気がつかないはずもなく。

「うん、やっぱり会えてよかったよ、エヘヘ」

「おまえ」

それは、演技なのか。

■第06話

およそ8年ぶりに再会を果たし、こいつは、『会うのが怖かった』と言った。

『後悔したくないから会えてよかった』とも。

そしてあの涙……まかり間違っ、それがなにか特別な意味を含んでいたとしたら、どうしてくれよう。

「はい、お待ちどうさま」

たとえば恋愛感情とか。

「たんと召し上がれ」

オカマは必要以上にアクの強いオネエ言葉を使うことがある。あれは、姿かたちだけでは女性になりきれないことをよく知っているからだろう。

「おいしい？」

こいつの場合、傍目からは、あえて女性を装う必要はないように見える。言葉の演出などなくとも、誰もが女性と見まがうに違いない。

「ああ」

が、そのあたりを本人がどう捉えているかは、また別の話で。

「よかったあ、覚えてたてだから、自信なかったの」

「塩スパぐらいで大袈裟な」

続けてさえいれば料理が上達するように、化粧や立居振舞も、いずれは洗練されていく。

「えー、塩スパって、シンプルだけに、塩加減が難しくない？」

だが、真の女性としての自信は、永遠に持つことはできない、それがニューハーフの宿命だろう。

「ゆうちゃん、塩スパは薄味にしとけばいいんだよ、後はお客が塩かけるなり胡椒ふるなり、勝手にやるから」

「うん、わかった」

「それもどうかと思うが」

そんな宿命を知ってか知らずか、ニューハーフは性別への追求をやめられない。

そのうえに、ルックスも言葉遣いも水準以上に達してしまっていて、こいつはたぶん、一般的な女性レベルを倣うくらいでは、もはや満足できなくなっている。

「亮一がよく食べるメニュー教えといてよ、他のも練習しとくから」

「あとで、な」

だから、ドラマのワンシーンみたいな甘ったるいムードにひたることで、やっと女性を実感するとか、そのあたりが絶えずこいつの行動原理になっているとしたら、どうだ。

こいつは劇団員のオーディションを受けたと言うから、演技の修練も相当に積んできているはず。

そういう背景を考えれば、あの涙にしたって、こいつにとってはお手のもの、むしろ得意技で……いや、わからんけど、そうではないにしても、目にゴミが入ったとか、コンタクトがズレたとか、理由なら他にいくらでも考えられる。

「まあ、ピラフとかドリアとか、そのへん」

それに、仮に恋愛感情として片付けてしまっても、それで何が始まるわけでもない。

「あとカレーもたまに」

「なんか栄養が偏ってそう」

普通の男女なら、展開はいくらでも広がりそうなものだが、こいつはニューハーフ、こちらは拒絶の一手だろう。

「歳とったら太るタイプだよな」

「ほっとけ」

かと言って急によそよそしくするのも不自然だし、とりあえずこんな感じでやり過ごす。

とにかく、こちらには恋愛感情など微塵もないのだから、一定の距離を保ってさえいれば、それで何も問題はない。

「なんだか、お二人、ウフフな感じですね」

だから、そんなことは、あり得ない。

「そう見えますう？」

ないないないない、絶対にない。

「うん、なんかいい感じです」

余計な詮索をするな、このくそスーツ女が。

せっかくホームグラウンド気運が挽回しかけていたのに、よもやこんな奇策でアウェー巻き返しを図ろうとは……クソッ、否定したいが、パスタがまだ口に残っている。

「実は子供のころから私達、ね、亮一」

よく嚙んで、飲み込んで、よし。

「ね、じゃねーだろ」

おまえもおまえで事態をややこしくするな、殺すぞ……って、ほら見ろ言わんこっちゃない、スーツ女の眼の色が好奇のそれに変わった。

「冗談ですよ、マジに取らないで、幼なじみってだけで、こいつニューハーフなんですから」

勢いで暴露してしまったが、仕方ないだろう、妙な誤解をされてはかなわない。

「亮一、それは」

牧島にしても、マスターには正体を明かしていたし、その際、とくに気負いはなかったようだし、問題ないだろう。

「ハハハ」

何がおかしい。

「あのさ、亮一が来る前に、それはもう話したの、村野さんは了解済み」

「ごめんなさいね、あんまりいい雰囲気だったから」

「なにその顔、アハハハ」

くそ、どうせ鳩が豆鉄砲くらったような顔でもしているんだろうよ、笑わば笑え。

「でもさ、亮ちゃん、ちょっと照れてた感じだったよね」

「あー、それ、私も思いました」

「なにになに、亮一、わたし脈アリってこと？」

女3人集まれば、いや、ひとり例外がいるが、好きにしろ、もう関知せん。

「無理ないですよねえ、私から見ても、悠さん、綺麗だもん」

「でしょー、だからメイド服もいいかなって思ったのよ」

こっちはメシに専念する、それだけだ。

「まー、それはさっきも言ったように、客層を限定してしまいますからねえ」

「でも、試してみる価値はない？」

「いえ、その手の客層というと、違う意味のマニアですからね」

気がつけば、結局アウェーになっている………が、メイドはいくら何でもNGだろう。そのあたりは口を挟む余地がありそうだ。

「ちょい、水おかわり」

メシを食い終わったらじっくりと。

「こう思うのよ、弟は着想は良かった、でもそれに見合う人材を見つけられなかった」

「いえ、常連さんが近づけなくなったら本末転倒ですし」

「だって服だけかわいくたって、ねえ」

それにしても、マスターは、スーツ女の話をもっと聞いていないか、聞いていても理解してい

ないか、どっちかだろう。

「ゆうちゃんなら、イケると思わない？」

とにかくメイドカフェを推したい気持ちでいっぱいのようなのだ。

「うーん、悠さん個人がどうこうではなくて、経営コンセプトなんですけどねえ」

認めたくはないが、この件に関してはスーツ女の指摘が逐一正しい。

「ビールのがいいかな？」

コップに水が注がれる……にしても、牧島、おまえもちょっとは否定したらどうだ。下手すると恥ずかしい格好をさせられかねない。

「それとも、ビールになさいますか、ご主人様、かな？」

まんざらでもないようだな、おい。

■第07話

帰ったらすぐに寝るようだ……なんだか知らないが、ビール1本でずいぶん酔ってしまった。

「……はあ」

アクビが出る……あのスーツ女のせいで余計なことに頭を使い過ぎた。

何者なんだろう、あいつ、流れでついに素性は聞けなかったが、やたらに専門的なのは、ショップコーディネーターとか、そういう類だろうか。

それにしたって、マスターがおかしなことを言わなければ、スーツ女にあれほど好き勝手させなかったものを。

悲しいかな、マスターには当世感がない。

この不景気に牧島を雇うような放漫経営もお構いなしだし、そのうえにメイドなんぞ馬鹿げた発想をするから、スーツ女に付け入るスキを与える。

「忘れ物」

「あ？」

不意に牧島の声が聞こえたかと思うと、目の前に何かブラ下がって。

「オレのじゃんか」

いや、しかし、それはおかしい、何故そこにケータイがある。

「このマは、どうだ、ちょっと反応がにぶい」

会計のときに出して、トイレに行って、それから。

「おかしいな」

なんで忘れたんだろう。

「ママが家まで送ってってやれって」

「あん？」

ケータイはともかく、アホか、そんな必要はまったくない。

「子供じゃあるまいに」

「大人は忘れ物なんかしません」

そうは言うが、人のケータイを、まるで猿にバナナでも見せびらかすように。

「でしょ？」

宙に泳がせて、しかも、それを、さも得意げに歩いて見せて、バカめ、そんな悪フザケこそ大人はしません。

「いいから、返せ」

「だーめ、なんか顔赤いし、フラついてる」

「ざけんな」

取り返そうとすると、待ってましたと言わんばかりにケータイを高く上げて、牧島は、とうとう走り出したが。

「おまえ、調子に乗り過ぎだろう」

追いかけてたまるか、バカバカしい。

「いい加減にしろよ、まったく」

「ほら、早く来ないと、メールとか、見ちゃうよ？」

にも関わらず、コイツ、ちょっとぐらい怒られてもへっちゃらという感じで。

「あはは」

まったく、いい気なものだ。

「って、おまえ、オレんち知らないだろ」

その意味を察したのか、牧島はやっと止まった。

「あれ、なんで？」

そのまま放っておけば次の路地を曲がらずに直進していたに違いない。

「そこ、右な」

「引っ越したの？」

「ああ、アパートだけだな」

「へえ」

まがり角で待っていた牧島の関心はすっかり路地の先に移ったようで、用済みになったのか、ようやくケータイを差し出した。

「おまえ、ケータイは今や証明書同然なんだから手荒に扱うなよ」

「うん、ごめん」

「それで、店に戻りなよ、ほんともう近くだし、平気だから」

「あー、それは」

それにしても、なんでまたこんな逆エスコートみたいなことになっているのか、その理由を考えないわけにはいかない。

「マスター、ほんとに送れなんて言ったのか？」

「うん、ケータイ忘れてるようじゃ危ないって」

「んー、そうか」

だとしても、これはやはり不自然に思える。

「けどなあ」

マスターのことだ、何か余計なことを企んでいるに違いない。

「実は私もヘンだなって思ったんだけど、休憩も取りたかったし、それに、話したいこともあったから、まあいっかと思って」

言うと、牧島はこちらの反応も待たずに歩き出したが。

「話したいこと？」

「うん」

その話を聞かないで、ここでバイバイという選択肢もある。マスターの思惑を推測するならば、まずは、その手に乗らないことが賢明だ。

「だから、ちょうど良かったかも」

それに、電柱の看板には、『痴漢、多発、キケン!』とあり、左側は薄暗い公園と駐車場……人通りが極端に少なくなっているのに、アパートに着いたその帰り、こいつはまた一人でここを通ることになる。

「ちょっと、待った」

「うん？」

「いや、やっぱいい」

しかし、よく考えたら、こいつはニューハーフ、そんな心配はいらなかった。下手に気を遣うと今度はこいつに妙な勘違いをされかねない。

「ハハ、なーに？」

「いいから、話があるんだろ？」

「ああ、うん」

とは言え、この容姿……女と間違われて襲われる、という可能性は充分にある。

「亮一にね、ロコちゃんが、会いに来るかも」

いやいや、まてよ、それでも実際は男なんだし、ナニも付いているわけだから、言ってみれば、痴漢どもを寒からしめるワナのようなもので。

「え、誰が？」

「だからロコちゃん」

やっぱり心配する必要はないが、ロコ……そいつは一体どんなワナだ。

「ん？」

いや、思い出した、こいつの言うロコとは。

「忘れちゃったの？」

「いや、六子だろ？」

「うん」

そして、もう一つ、こいつが狼ニューハーフだということも思い出した。

「そうか」

ニューハーフになってしまったバカ者に、周囲がどんな感想を抱いているのか、気になってはいた。

「で、六子が？」

六子でも誰でも、こいつ以外の者から話を聞けるなら、それに越したことはない。ニューハーフにどう接したらよいか、きっと良い参考になる。

「うん、もうじきね、上京してくるの、だから」

だが、こいつの身の上話の件では、先日、思いっきり騙されて泡を食ったばかりだ。

「大学がね、3年から東京の校舎に移るんだってさ」

油断はできない。

「すごく綺麗になったんだよ」

これもその手のイタズラという可能性がある。

「ん、どうしたの？」

考えるうちに、アパートに着いた。

「ここ、オレンち」

問題はここからで、ねねねまでが約500メートル、そのうち犯罪多発とされる薄暗いゾーンは100メートル……とは言え、大声を出せば周りは住宅街だし、看板が警告するほどの危険性

はないと思う。

「そっか、じゃあ、ここで」

しかも、こいつはニューハーフ、煮ても焼かれても死なない。

「待て」

それでも……………なんとなく、送っていったほうが良いような気がする。

「うん？」

せめて大通りに出るまでは。

■第08話

荷物持ちの報酬が食事代タダなら、妥当な取引と言える。

「ごめんね、さっきママからメール来てさ」

だから軽く引き受けてしまったが、駅で待っていたのはマスターではなく、牧島だった。

「べつに私一人で平気だったんだけど、なんか勝手に話を進めちゃったみたいで」

「で、なんなの、この大荷物」

「制服だよ」

マスターめ、とうとう悪魔のプランに踏み切ったらしい。

「それぜんぶ？」

「うん、村野さんが、色々案を出してくれて」

村野とは、あのスーツ女のことか。

「最終的に日替わりならってことになってさ」

「じゃあそっち全部持つ」

「ごめんね」

なるほど、スーツ女の干渉で、マスターが何らかのプランを進めていることは知っていたし、それが実行段階に移ったこともよく解った。

しかし、この状況と牧島の話を総合すると、マスターがもう一つ別のプランを仕込んでいる可能性を疑わずにはいられない。

「マスターは、あれだな、たぶん」

「うん、ごめん」

よくよく思い返せば電話口でのマスターの話には主語が抜けていて、当事者は後からいくらでもすり換えられる内容となっていた。

日ごろマスターの素行をよく見てきているだけに、そこに作意が潜んでいることなどは容易に見破らなければならなかった。

なのにまた、こうして二人、並んで歩いている。

「迂闊だったな」

何故マスターがこんな企みを思いついたのかは想像がつく。

「うん、ここまでするとは思ってなかったから、ごめん」

そこは牧島もよく解っているようだ。

おそらく、この前の店の帰り、こいつを送りによこしたのも、これと同じ脈絡だったに違いない。

馬鹿げている、こいつがニューハーフであることを承知しながら、まさか、二人の間を取り持とうとか、そんなおぞましいロマンスを本気で追求しようと考えているなら、それはもう悪意と言うしかない。

「どうしたもんかな」

「ほんと、ごめんね」

それはそうと、さっきから牧島は謝ってばかりのようだが。

「別に、おまえが悪いわけじゃないだろ」

悪いのは、実現不可能な情事をゴリ押しするマスターであって、牧島はむしろ被害者と言える。

「だけどさ、うーん、やっぱりね、私がさ」

何が言いたい。

「ほらこの前さ、そのさ」

まさか、おまえもこの茶番劇に加担しているわけではあるまいな。

「この前が？」

「うーん、言いにくいな」

一体どんなサプライズを隠し持っているのかわからないが、言い渋ったあげく、牧島はとうとう立ち止まってしまった。

「なんだよ」

そんなに意味深にされたら顔をのぞき込まないではいけない。

「村野さんが来てたときさ」

しかし、見て……………わかった。

「私、亮一にさ、気があるみたいなこと言ったじゃん」

あるいは見てはいけなかったのかもしれない。

「だからさ、ママが気を利かして、こんなこと」

明らかになったマスターの陰謀よりも、言葉が裏付けている牧島の事情よりも、その横顔がもっと重大な事実を告げている。

「だから、ほんとうごめん」

どんな名女優でも、こんな生理現象までは表現できまい。

紅潮しているこいつの頬が、何よりも明確に真相を伝えている。

無理やり理由をこじつけたあの涙も、今こうして牧島の恥じらいを目の当たりにした後では、演技ではなく、本物だったと思えてくる。

「おまえ」

「うん」

あれは、抑えていた感情が、耐えがたくあふれ出ようとする、その瞬間だったのかもしれない。

「そのさ」

しかし、それでもう充分、あらためて問い質す必要はない。

「まあ、そんなに気にするな」

「うん」

なのに、どうしてか、飲み込んだ言葉が消えない……………これ以上深追いしてどうする、何を聞き出そうと言うのか。

「じゃあ行こっか」

それに、聞いたところで、どうにかなるわけではない。その件は既にシミュレートしたはずだ。今までどおり、普通に接していれば良い。

「信号、変わるよ」

なのに、何故、こんなに落ち着かない。

「ほら、早く」

さっきまでの恥じらいは何処へ行ったのか、牧島の飄然としたせつつきが、ますます錯綜を誘う。

「こっちだよ」

「あ？」

横断歩道を渡ると、牧島は何故か右へ曲がったが、そっちは方向が違う。

「急がないと」

たしか、前にもこんなことがあった。

「どこへ行くつもりだ」

「あそこ」

だが、牧島が指差しているのは、以前とは明らかに違う、大きなビルで、最上部のイルミネーションには、カタカナではなく、ローマ字が綴られている。

「ミセス・バーガーじゃないのか」

「アハハ、違うよ」

今まで幾度となく見てきた光景だが、特にそれがどんな建物か、気に留めたことはなかった。

「身のほど知らずと言うか」

「え？」

「看板に偽りありと言うか」

うまい喩えが見つからないほど、胸糞悪い。

「この際ハッキリ言っとくが、オレにそういう趣味はない」

イルミネーションの綴りの後半部は、間違いなく、HOTELと読めた。

■第09話

まず、鍋に水を張り、研いだ米をひたし、30分ほど待つ。

が、面倒なので火をつける。出汁に粉末モノを小サジ一杯ほど入れておく。

うっかりしてると吹きこぼれるから、ここから5分ほどは気が抜けない。

味付けは、食べるときに塩で加減する。

具は、ほぐし鮭が冷蔵庫にあったはずだし、海苔とネギを散らせばそこそこの見栄えになる。

もし鯛の刺身なんかがあれば、なお良い。

余熱で生煮えっぽくしてやると、おかゆもちょっとした御馳走だ。

「ちっ」

だが、贅沢は言っていない。サバイバル風情にはこれで充分。喫茶店はもちろんのこと、ホテルのスカイラウンジで食事なんてのは、もっての外だ。

「ったく」

マスターの言う食事代タダというのは、つまり、そういうことだったわけだが、そんなこととは露知らず、ホテルの文字を見た瞬間、宿泊を意味しているものと勘違いして、えらいバツの悪い思いをした。

おかげで、言わなくていいことまで言ってしまった。

牧島はただ笑っていたが、あんな大げさに拒否されたら、内心ショックだったろう。

お互いにマスターの悪戯に翻弄されただけだと言うのに、意中の者の拒絶の言葉を情け容赦なく聞かされる目にあっただから、そりゃ傷つくに決まっている。

いやいや……違う、あいつはニューハーフだって言ってるじゃないか、そんな心配をしてやる必要がどこにある。

「くそ」

それも、わからなくなった。

そもそもニューハーフってなんだ。外見だけじゃなく、心も女だって言うのなら、それ相応に扱わなければいけないじゃないか。

あいつと会えば何かしらの対応を取らねばならない。

そこで適切なのは、子供時代の付き合いを過不足なく継承することだと思っていた。

あいつが恋愛感情を持っていても、こちらが姿勢を崩さなければそれで何の問題もない、旧来の関係が続けられるはずだろう。

なのに、注文どおりの会話をしているだけで、どういう訳か、お約束の関係が進展していくような危険を感じる。

幼なじみという関係上、そもそもあいつとの距離は近い。そのうえ、あいつを女性扱いしなければいけないとなると。

「お」

考えるうちに、鍋が頃合になった。

「よし」

沸騰後は弱火にしてフタをする。フタはずらして1時間ほど煮詰めれば出来上がり。

それまでは、テレビでも見てお茶を濁すか、ネットで就職情報のチェックでもするか、それか、ねねねに……いや、それではおかゆの意味がなくなる。

「強がりじゃーなーいけど♪」

そこへ狙いすましたようにマスターの着うた、心を読まれてもしたらしい。

「はい」

だけど今日は行かない。気持ちの整理がつくまで牧島には会わないほうがいい。

「ちょっと、亮ちゃん、何してんの」

出るなり鬱陶しい……………何してたって構わないだろう。

「いや、別に」

「いつもの時間になってもちっとも来ないから」

何を仰いますやら、そんな契約を交わした覚えはございません。

「すぐにピーマンに行ってくれる？」

「はあ？」

話がぜんぜん見えない。

「ゆうちゃん、そこにいるから、早く」

いや、俄然見えてきた。

「はあ……………」

なるほど、性懲りもなくまた愛の使者になろうという魂胆らしい。随分と手口が強引になったもので。

「マスター、それだけどさあ」

しかし、この心境で牧島と会いたくはない。

「あの子、追われてるんでしょ？」

「はあ？」

今度は何の話やら。

「店の外にいるらしいの、その人、うろうろしてるんだって、警察はダメだって言うし、どうしよう」

「はい？」

「だから裏から、ピーマンでしばらく様子見るって、出てって、それで」

ケータイを切った。

何が起きているのか、わかった。

ピーマンまでは5分くらいかかる。

走れば3分、鍵はどこだ、そこか。

「強がりじゃーなーいけど♪」

待った、火を消してない……いや、かまわない。

「たいくつにはーなれーてるー♪」

わかってるって、うるさいな、今はそれどころじゃない。

■第10話

勢いでここまで来てしまったが……わからない、このまま会ってしまっているのか、会ったとして、どう対応すればいいのか。

「お客様、お一人ですか？」

「いえ、知り合いが、来てると言うんですけど」

「ああ、待ち合わせですね？」

「あ、そうです、どこか、そのへんに、えーと」

「亮一」

探している側とは反対のほうから、牧島の声がした。

「こっち」

見ると、牧島が小さく手を振っている。

「ごゆっくりどうぞ」

首を少し傾けて、透きとおるような栗色の髪をゆっくりかきわけながら、顔を上げ、人差し指を放ち、鮮やかに放物線を描いてみせて。

「そっかあ、ママが呼んだんだね」

涼しげな眉……漆黒の瞳……やわらかい鼻スジ……淡い彩りのリップ、それらが織り成す面立ちは、静かな気高さと慈しみを湛えていて、普遍的な女性象を想わせる。

いや、むしろ、理想的と言うべきか。

「急いでて、ケータイ持って来れなかったから」

とにかくこいつは女にしか見えない。

「困ったな、ママも、うーん、そう来るかあ」

そのうえ、秘めていた純情を、あどけない少女のようにハニカんで見せられたら、精神や本質まで、こいつのすべてが女に思えてくる。

「出るぞ」

「え？」

だから、こいつが危険にさらされると、こうやって助けに来てしまう。

「私なら大丈夫だよ」

「いいから」

「ちょっ」

普通なら、男に対してなら、ここまでするとは思えない。

放っておけないのは、こいつが女だからだ。実際の性別がどうあれ、心が、深層心理が、こいつは女だと、そう訴えるからだ。

「すみません」

「お会計ですね、ありがとうございます、伝票のほうお預かりします」

困っているのなら力になりたいし、傷ついているのなら、なんとかしてやりたい。

「ケーキセット一点で、788円になります」

「じゃ、これで」

「ポイント払いですね、そちらに端末をどうぞ」

ホテルでの食事をアレと勘違いして悪態をついた、あの後味の悪さと言ったらなかった。

「はい、結構です、明細を確認ください」

もっと言葉を選ぶべきで、もっと優しくするべきで。

「OKです」

しかし、その延長線上には禁断の世界が待っているような気がして。

「ありがとうございました、またのお越しをお待ちしております」

ニューハーフやホモやゲイ、その手の人たちに対する拒絶反応が口を突いて出る。

「行くぞ」

また非道い言葉を浴びせてしまうかもしれない。

「行くって、どこへ？」

「いや……」

「考えてないの？」

「まあ、その、うん」

「えー、だったらピーマンに居れば良かったじゃん」

「たしかに」

「私ここの雰囲気けっこう好きなんだよね」

「ふーん」

「適度にお客を放っておいてくれるというか、ほら、ねねねだとママが友達感覚で接してくれて、それが嬉しかったりするけど」

「うん」

「だけど、ときにそれが暑苦しくもあるじゃん」

「ぶっちゃけたな、まあ、それは俺も同感だけど」

「亮一はまだいいじゃん、私は一日中一緒なんだよね、だからときどき抜け出したくなってさ」

いや、その状況には同情もするが、なんというか、話題が能天気すぎる。

「ママのはサービスと言うより、家族愛に近いよね、親身になってくれて、うん、ほんとのママみたい」

こいつ、自分が追われている立場だということを忘れてやしないか。それにマスターをそんな情に厚い人のように言うな。凶に乗るから。

「比較すると、ファミレスのサービスはどこか他人行儀で、決して家族にはなれないけど、さっき言った適度な距離感とか、どんなお客さんでも差別せず同等にサービスしてくれるところなんかは、いいよね」

そうそう、逆にマスターは適度とか加減というものを知らない。

「って違うわ、おまえ、今それどころじゃないだろう」

「それどころだよ」

「はあ？」

「今日、亮一が来てくれたのは、それはサービスなのかな、家族愛みたいなものなのかな」

何を言い出すのかと思えば、こいつは。

「それとも、もっと違うもので、たとえば、その、私のこと」

的外れな話のようでありながら、実は的のド真ん中を射抜こうとしているのかもしれない。

街灯の明かりではその表情まで確かめられないが、そこで言葉をためらうのは、昨日のホテル前と同じく、恥じらいに頬を染めているからで、それで。

「おまえ」

だとしたら、どうすればいい。ニューハーフへの拒絶感に任せてこいつを責めても、どうせまた後で悔やむことになる。

「うーん」

しかし、このままでは。

「あのさ、亮一は、私が幼なじみだから、こんなにしてくれるんだろうけどさ、あんまり優しくされると」

そう、おまえはきっと勘違いして。

「私のこと好きなのかなとか、思っちゃうじゃん」

そう、まさにそう。そう思われるのが嫌だったが。

「そ」

下手を打つと、おまえを傷つけてしまいそうで、どうにもできずにいたから。

「そうか、そうだよな、まぎらわしいよな」

正直助かった。意外にも、懸念の主、自らが事態の收拾に乗り出そうとしているのかもしれない。

「おれ、ちょっと世話やきすぎか？」

「うん、だからもう、ハッキリさせよう」

同感だ、この際だから関係を修正しておいたほうが。

「あ？」

後々いいとは思うが、何故か牧島は。

「おい」

距離を詰めてきて。

「アハハハハ」

避けようとしたが。

「ほんと、バカだな亮一は」

手遅れだった……覚えのある香り……牧島に抱きつかれて。

「わかったでしょ？」

身動きが取れない。

「これが答えだよ」

胸に、牧島の声と、息づかいと、微熱が伝わってくる、それでも。

「だいたいさ、嘘に決まってるじゃん、そんなの」

罵るわけにはいかない、突き飛ばすわけにもいかない。こいつを傷つけることは、なるべく避けたいが。

「ちょっと息抜きしたかっただけ」

「あ？」

ただ、漠然とした言葉の中で。

「うそ？」

それだけが耳に残って。

「そ、追手なんかいないよ」

「は？」

「だから、もう心配しないで」

「どういうことだよ」

わからない……すべてをひっくり返されたような気がしてならないのに、腕をほどき、静かに背を向ける牧島を。

「じゃあね」

このまま帰していいのか、呼び止めるべきなのか。

「ちょ……」

わからない。

■第11話

さて、このタイミングで送られてきたメールを信じてよいものかどうか。

『tiana_250xv@*****.co.jp』

要するに、あいつはねねねをサボる口実に世間の目を忍ぶ売れっ子アイドルを気取っていたわけ。

「ふざけやがって」

そんなの嘘に決まっている。よく考えれば誰でも判ることだ、オーディションに受かったばかりの新人の知名度なんて無いに等しい、まだファンもいなけりゃ週刊誌も目をつけていない。

誰があいつを追いかける。

前々からおかしいとは思っていた。

だいたい期待の新人がねねねでバイトなんかしない。

オーディションや劇団の話だって疑わしい。

どこまでが本当で、どこまでが嘘なのか、ひとつひとつ洗いなおしてみる必要がある。

『はじめまして、私は牧島のマネージャーを担当している者でティアナと申します。ぶしつけとは存じますが、緊急につきメールさせていただきました』

このメールを見るかぎり、あいつにはマネージャーが付いていて。

『ティアナ』

この名前………ハンドルネームかあだ名か、あるいは外人かハーフの線も考えられる。

『牧島について重要なお知らせがあります』

そして、ニューハーフの芸名という可能性も充分にある。

『至急、下記番号まで連絡ください』

このメールが狼ニューハーフの仕業でないとは言い切れない。

『090-****-****』

まあ、番号は知らせてきているわけだから。

「090-****-****」

かけてみれば、嘘かどうかはハッキリするが。

「もしもし」

ワンコールで出やがった。まるでケータイに張り付いていたかのように。

「えっと、メール頂いた瀬良ですが」

「ああ、瀬良さん、お忙しいところすみません」

そして、女性の声ではあるが。

「いつも牧島がお世話になっております」

よかった、少なくとも牧島の声ではない。

「いきなりメールを送りつけるのは失礼かと存じましたが、なにぶん緊急でして」

「ああ、なんかメールにもそう書いてましたねえ」

「はい、このままでは瀬良さんに多大なご迷惑をおかけする恐れがあったものですから」

「はあ、それはまた、どういう」

「あの……牧島に騙されているのを、ご存知ですよ」

「えっと、はい」

「まことに申し訳ございません、もっと早くに手を打つべきでしたが、諸事情で混乱してしま
して、現場をあの子に任せてしまったものですから」

そしてマネージャーというのも嘘ではなさそうで。

「対処が遅れてしまい、瀬良さんにはたいへん不快な思いを」

その言葉には、責任を背負った者のリアリティが感じられる。

「そこで、ここまでの経緯も含め、すべてを瀬良さんにお話しようと思うのですが、いかがでしょう」

「はあ」

「瀬良さんが何もかも知っていれば、彼女も嘘をつきようがないですから」

「ああ、なるほど」

確かにそれは有効な手段と言える。追手などいないと予め知っていれば、ピーマンの件にしても未然に防げたわけで。

「では、これからお会いできますか？」

「えっと、それはかまわないですけど」

ただ、会うというのはどうだろう、経緯だとか、そんなのは今この場で聞けば済む話で。

「そこまでする必要がありますかね」

すでにあいつが嘘つきであることはハッキリしているのだから、あとはこちらが用心するだけでよいように思うが。

「ええ、もちろん彼女のプライバシーに関わることですから、当方としてもあまり口外したくはありません」

「はあ」

いや、そんな心配などはしていないし。

「瀬良さんのことも実際よく存じ上げておりませんので、失礼ながら信用しているわけではありません、瀬良さんから彼女の情報が拡散してしまうリスクもあると思っています」

うん、確かに失礼な話だが、それも置いといて。

「それでも瀬良さんにすべてをお話しようと思うのは、彼女の暴走を放置することのほうが、それ以上に危険だからです」

このティアナというヤツの口ぶりは、責任を負う者のそれと言うよりは。

「ですから、話を聞いていただけませんか、それで瀬良さんに実害が及ぶことはなくなりますし、結果、彼女を救うことにもなるんですから」

なんだろう、いちいち大袈裟な気がする。実害と言っても、追手の件で踊らされたりとか、抱きつかれたりとか、そんな程度であって。

「えーとですね、お話はうかがいますよ、それに会うのもゼンゼンですけど」

「よかった、ありがとうございます」

いや、だから、そうではなくて、ゼンゼンの後に、『そんな深刻に考える必要があるのか』と続けるつもりだったのに。

「じゃあ、どうすればいいですかね」

まあいいや、なんだかもう、断わるのも面倒くさい。

「それでは2時半ごろに女流世神社というのはいかがでしょう」

「わかりました、いいですよ」

「おそれいります」

それに、事情を知りすぎて損をするということはない。

「では、後ほど」

実際、ちょっとホッとした。

あいつにはマネージャーがついている、つまりどこかの芸能事務所に所属している。

全部が全部、ウソというわけではなかったのだから。

■第12話

蝉しぐれの境内、拝殿わきの涼み台に座っていたのは、金髪カールに、鬼ビューラーしたまつ毛が印象的で。

「こんにちは」

立ち上がると意外に背が高く、フリルのブラウスにタイトなスラックスという……まるでベルサイユ宮殿からやって来たような。

「ティアナさんですか？」

「ま、どうぞ、こちらへ」

「はあ」

そうだった、ノーマルとは限らない。牧島のマネージャーをやっているくらいだ、どんな可能性も否定はできない。

「こっちです」

それはそうと、どこへ連れて行こうというのか、ティアナは能舞台の裏へと歩いて行くが。

「あ………れ」

昔、裏には雑木林が広がっていて、目ぼしいものと言えば、掃除用具を収納するための納屋と、不法投棄された産業廃棄物ぐら이었다のに。

「へえ」

いつの間にか、大きな駐車場が整備されている。

納屋があった場所には手水舎が設置され、水盤の周りにはベンチがあり。

「瀬良さんが驚いている理由、わかりますよ。ここは、お祭りに使う都合上アクセスを近代化するしかなかったそうです。お客さんの来訪もそうですけど、120段もある表の階段からあれこれ搬入するのはタイヘンですから」

しかしもっと驚くのはティアナの口ぶりで。

「ただ、便利にはなりましたが、景観が壊れてしまって、なんだかちょっと寂しいですね」

牧島から聞かされて多少のことは知っているのかもしれないが、境内の今と昔を比較できるとしたら。

「ここ、来たことあるんですか？」

「はい」

そうでもない限り、無理だろう。

「とりあえず、あちらに座りましょう、とても涼しくて気持ちがいいですよ」

「はあ」

促された手水舎の水盤からは絶え間なく水が溢れ、下の堀に溜まるようになっている。

そして、足湯ならぬ足水だろうか、ベンチは堀に足を投げ出さないと座れない構造で。

「入りましょう、せっかくですから」

「はあ」

「夏は冷たいですけど、冬は温かくなるので、参拝者の憩いの場として一年中利用できるそうですよ」

ティアナに倣い、靴を脱ぎ、足をひたすと。

「どうですか？」

「はあ、いいですね」

そりゃまあ、たしかに気持ちはいいが。

「別に神秘のエネルギーが作用しているわけではないですよ、ほら、屋根を見てください、緑廊もそうですけど、太陽光パネルが設置してあって、そこから電力を取っているんです」

「詳しいんですね」

「お盆祭りに私たち劇団を呼んでいただいたんですが、そのときに町内会の役員さんから色々とお話を伺いまして」

「なるほど、そういうことですか」

それはわかったが、緊急緊急と呼び出しておいて、足水で神社談義もないものだ。

「牧島も、そのお祭り、出たんですか？」

そろそろ本題に入ってほしい。

「はい」

「あいつ、そんなこと一言も言ってませんでしたよ」

「ええ、それが、そもそもの誤りなんです」

「と言うと？」

「最初は、あの喫茶店にも、立ち寄る予定はなかったんです」

「ねねねのことですか？」

聞くと、ティアナは少し神妙な顔をして。

「はい、申し上げるのが遅くなって本当に申し訳ありません、さっきもお伝えしたとおり、私たちは、お祭りの公演のために来ていたんです」

そして、やっと本分を思い出してくれたようだが。

「寄り道しているような余裕はありませんでした。マイナー劇団ですので、興行だけでは回していけませんから、資金不足をバイトで補填しているんです、今回もお祭りが終わり次第バイトに行く予定になっていました」

「牧島も、ですか？」

「そうです」

つまり、牧島は幼なじみに再会するつもりで帰ってきたわけではなく、あくまで仕事で故郷を訪れたと言うのか。

「じゃあ、なんであいつ」

「はい、ところがですね、その日、急にバイト先からキャンセルの連絡がありまして、午後のスケジュールが丸々空いてしまったんですよ、だったらもう、この際だから羽目を外してみんなで飲みに行こうって話になりまして」

改めて問い質したくなる……あいつの本心を。

「そうになると、自然とこの辺りの地理に明るい者が先頭に立たされて、仕方なく心当たりを探す

のですが、この町に戻ってくるのは久しぶりですし、よく考えたら子供のころに居酒屋なんて行ってませんから、けっきょく期待には応えられず、さて困ったなと思っていたところ、ふと瀬良さんのことを思い出して」

だから電話してきた、要するにそういうことだ、幼なじみとの恋愛を求めていたわけではなく。

「とは言っても、ニューハーフになったことを瀬良さんは知らないから、いきなり訪ねても誰だか判らないだろうって言ったら、誰かが、それを逆手に取ってドッキリを仕掛けようなんて言い出して」

それはそうと、ティアナの物言いは、どこか妙で。

「止めたんですけどね、こういうのは消極的にやると却って気を遣わせてしまうから、むしろ派手にやったほうがいいって、押し切られてしまって」

三人称である牧島の話、まるで。

「もう不安で仕方ありませんでした、ニューハーフってことで、ただでさえドン引きされるかもしれないのに」

まるで自分が体験したかのように一人称で語る。

■第13話

「だって、女の子になる前の知人に会うのは、それが初めてだったんです。性同一性障害であることは、ずっと隠して生きてきましたから」

内容からすれば、これは牧島のエピソードに違いない。

「親は受け入れてくれましたが、男の子が突然女の子になったら、ご近所や学校の友達は何に思うでしょう。だから表向きは、男の子として振舞っていたんです」

牧島の生い立ちをティアナが代弁している、という認識で間違いないはずだが。

「でも、誰も過去を知らない遠く離れた土地でなら、女の子として人生をやりなおすことができるかもしれません」

おかしい、何かがズレている。

「親の勧めもあり、私は、中学を卒業してすぐに、父方の実家がある栃木県に引っ越しました」

いや、ズレているどころか、今、ティアナはたしかに。

「この町に戻ってくるのは、それ以来です」

「え、待ってください、これって牧島の話ですよ」

「はい、ですから、私の変わり果てた姿を見て、瀬良さんがどう思うのか、それを考えると怖くて」

まただ、また言った、『私』とハッキリ。

「実際、ドッキリのネタばらしをするために、私は喫茶店の外にスタンバっていましたが」

「ちょ、何を言ってるんすか？」

「ドキドキしていました、足が震えるくらいに」

そんなはずはない。

「もう、おわかりですよ？」

違う、絶対に違う。

「ごめんなさい、私が本当の牧島悠なんです、あの日は、私に成り代わってあの子が瀬良さんにドッキリを仕掛けていまして、最後、私がネタばらしをする段取りになっていたんですが」

こいつ、何をバカなことを言ってやがる。

「途中、私だけ急用で事務所に戻ることになりまして、その後のフォローをあの子に任せました」

頭がおかしいとしか思えない。こんな辛気臭いところに呼び出しておいて、そんな戯れ言をぶちかまそうとは。

「それが、翌日に経過を聞いたら、あの子、まだ瀬良さんに真相を伝えてないと言い出して、その後も、何度か催促したんですが、一向に応じる気配がないので、こうして私が」

「ハハハ」

まったく笑わせる。

「ごめんなさい、冗談ではないんです」

「冗談でしょう」

予感はしていた、最初から、心のどこかで何かが燻っていた。

「すぐに受け入れてくれとは言いません」

「受け入れられるかよ」

だって、どう考えたって、おかしいだろう。

「落ちついて聞いてください、ってゆうか、聞いてね、ここからはタメ口でいくから」

最初に会ったときから、不可解なことばかりだった。そうは思いながらも、無理やりに納得して、関係を壊さないようにしてきた、それが。

「ここに連れてきた理由、わかる？」

どうやったら、こんな馬鹿げた結末になる。

「ここにあった納屋の前には、テーブルみたいなものがあって、たぶん電線をまくものだと思うけど、それが腕相撲するのに調度いい高さでさ」

どうすれば、そんな話を信じられる。

「よく腕相撲したよね、勝つのはいつも私だったけど」

信じたとして、それでどうなる。

「亮一は負けず嫌いで、もう一回、もう一回って、いつも5番勝負くらいになって」

茶番はわかりきっている。

「それで一度だけ、わざと負けたら、亮一、手を抜くなって、すんごく怒ってさ、覚えてる？」

だったら、あれは誰だ。

「私は、亮一が勝って喜ぶ顔を見たかったってだけなんだけどなあ」

こいつが牧島だと言うなら、あいつは一体誰なんだ。

「それが証拠ってわけじゃないけど、言いたいこと、わかるでしょ、あれは自分が女の子だってことに気づき始めたころの私」

「ハハ」

「私が本当の牧島悠なんだよ」

近くで、蝉が一鳴きして、飛び去っていくのが聞こえた。

「ごめんね」

駐車場には、まばゆい陽の光が、蟹気楼をたずさえて、まだ暑い、夏の午後を告げている。

「あの日、私の代わりに亮一の前に現れたのは、うちの団員の一人なんだけど、ニューハーフでもなけりゃ、もちろん性同一性障害でもない、ノーマルな女の子でね」

ねねねの、ウィンドウ越しの笑顔。

ミスバーガーで見た涙。

ホテル前での恥じらい。

昨晚の、吐息と微熱と甘い香り。

「ほんと、ごめん」

あいつとの逢瀬が、胸をかすめては消えてゆく。

それを、今さら嘘だったなんて。

「後日、彼女にも謝罪に行かせるからさ」

ふざけるな、許せるわけがない。

■第14話

蛇口はちゃんと閉めたはずなのに、しずくが落ちて、苛立たしいリズムを刻んでいる。

『あくまで飲食店ですのでえ』

暑さで水道管が膨張したか、パッキンが劣化したのか、わからないが。

『ええ、そうなんですう』

よりによって、どうして今日なんだ。

『そりゃもう、萌え萌えですよお』

おまけに、近所に何がしかの勧誘が来ていて……なんだよ萌え萌えって、うさん臭い。

『ええ、ええ、はい、ええ』

声からすると、隣の6号室か、そのまた隣の部屋あたりか。

「くそ」

わかっている。腹立たしいのはそのせいではない。

『あ、そうなんですかあ』

やはり考えずにはられない。

『来週オープンしますので、はい』

小顔で、かわいくて、スタイルが良くて、おまけに幼なじみ……そんなのに惚れられて、萌えないヤツはいない。

『そんなことないですよお』

萌えないとしたら、それ相応の理由があるはずで。

『萌えでも不萌えでも大歓迎です』

たとえば相手がニューハーフだった場合、それは十分すぎるほどの不萌え理由となる……というか、なんだよ、不萌えって。

『はい、お待ちしてまーす』

勧誘の女、妙な電波を飛ばすの禁止。おまえのせいで、こっちまで言葉がおかしくなる。

「はよ帰れ」

って、そんなことはどうでもいい。

とにかくダメなものはダメ、どんなにかわいくても、どんなにスタイルが良くても、ニューハーフは恋愛対象にはならない。

そう思えばこそ対応に苦慮してきた。

『こんにちわあ』

易々と乗り越えてきたわけではない、あれこれ考えあぐね、あちこち迷いながら、やっとの思いで距離を保ってきた。走り出しそんな衝動を懸命に堪えて。

『どうも、こんにちわあ』

それが、徒労に終わるなんて。

『あ、そうなんですかあ』

あいつはドッキリの名の下《もと》に、幼なじみのニューハーフという役柄を演じてただけで。

『いえ、そんな』

そこには、本心など、望むべくもなく。

『わかりましたあ、失礼しまーす』

甘い考えは捨てたほうがいい。ドッキリが終われば、すべては無かったことになるわけで。

幼なじみではなくなる、ニューハーフでもなくなる、無職の冴えない男に惚れるなんて現実味のない話も、そりゃねえだろう、ってな具合に片付けられて、やがて忘れ去られていく。

あいつはねねねを辞め、元の生活に戻り、今後一切この地を訪れることはない。

「ったく」

あんなチャンスは二度と来ない。

こんなことなら、我慢するんじゃなかった。

昨日、あのまま抱き合っていたら、キスの一つもできたろうに。

いや、それよりももっと以前、ホテルでのディナーの後に、あいつを誘っていたら、そのまま朝までコースの可能性だってあった。

いつだったかアパートまで来たときも、うまく中に連れ込みさえすれば、もしかしてR18なことになっていたりとか。

「ないか」

バカだな……ありえない。どれだけIFを並べても、あいつの恋愛感情がお芝居だった以上、もう何も報われはしないのに。

『こんにちわあ』

つい考えてしまう、もしも事前に真相を知っていたら、女だと分かっていたら、あいつともっと普通に付き合っていたのではないかと。

『はい』

『あ、どうも、こんにちわあ』

『なんですか？』

『えーと、今度こういうお店ができるんですけど』

『はあ』

『これチラシです』

それはそうと、勧誘の女、6号室まで来ておいて。

『アーケードを抜けたところの、ケーキ屋さんありますよね』

ウチを素通りして、8号室へ行ったようだが。

『その隣のお店です』

どうして気がつかなかったのか。

『今までは普通の喫茶店だったんですけど』

これって、思いっきり聞き覚えのある声で。

『このたび、リニューアルすることになりました』

内容も、ねねねのソレに違いない。

『それで、こちらのチラシを持って来店されたお客様には』

『いやあ、ちょっと』

『ワンドリンクサービスしますので』

ドアを開けると。

「すみません、ウチ、そうゆうの、お断りしてるんで」

「いえ、あの」

一方でドアの閉まる音がした。通路には夕闇が迫り、薄明かりが微かに人影を映していて。

「ありゃ？」

ニセ者でも、実の名を知らないから。

「牧島」

こう呼ぶしかない。

「うーん、亮一のところは最後に寄ろうと思ったんだけど」

少し涼しい風が、熱気の名残りをなだめるように吹き抜け。

「まいったか」

白いワンピースを小さく揺らした。水道はあい変わらず苛立たしいリズムを刻んでいる。

■第15話

謝罪に来たのだとしたら早すぎる。

ティアナ……改め本物の牧島は『後日によこす』と言っていた。

「大事な話があるから、あがってもいいかな？」

いや、予定を前倒しにしたのかもしれないが。

「まあ、どうぞ」

「オジャマしまーす」

それにしてもノリが軽すぎるような気がしないでもない。

「ふーん、やっぱ男の子だね、けっこう散らかってる」

あるいは、つい1時間前のことだから、ティアナが真相を明かしたことを、こいつはまだ知らされていないとか。

「で、大事な話って？」

「その前に、なにか飲み物もらっていい？」

「ああ、適当に」

「もうノドからからでさ」

または、謝罪するつもりではいるものの、惰性で今までのキャラが抜けていないという線もある。

「じゃあ、麦茶もらおうかな」

「コップは流しの横な」

こちらとしても、それは同じで、こいつがニセ者だと認識はしていても。

「うわ、なんか、ちょっとキチャない」

「気にすんな」

「えー」

今さら他人行儀にはできない。こいつがねねねに来てからすでに三週間。それだけ経てば情も移る。

「もう洗っちゃうよ、姑みたいに洗っちゃうよ」

「好きにしろ」

「ついでだから他もね」

こいつは劇団員だから、どこまでが演技なのか、素人目には判定できないが。

「これは、お粥でも作ったのかな」

役柄に100%徹するなんて不可能だろう、どんなに冷酷なヤツでも、多少なり私情が混じってしまうもので。

「亮一、ちゃんと食べてる？」

確かめたい、こいつがどう思っているのか、本当のところを。

「夏なんだから、もっと栄養とらないと、バテちゃうよ」

「ほっとけ」

「サラダだっていつも残してるし」

「おまえは俺の彼女か」

「ビタミン剤とかで補ってるわけでもないんでしょう？」

「だからおまえは彼女かって」

「違うけど、あれは、そういうことじゃないよ」

「はあ？」

「昨日、たしかに私は亮一に抱きついたけど、それは幼なじみには限界があるって知ってほしかったからで、なにもファミレスのサービスにしようってわけじゃないよ」

「なんだよそれ、いきなり、ワケわかんねー」

「亮一が迎えに来たのはサービスなのか、家族愛なのか、それかもっと他のものなのかって聞いたじゃん、その続きなんだから、言わなくたってわかるでしょ、彼女にはなれないけど、家族的な付き合いはできるでしょって、そういう意味だよ」

「おまけに、俺がフラれたことになってんのかよ」

「違う、そんなこと言ってないでしょ」

わかっている、ツッコミ処《どころ》はそこではない。

「あのとき亮一は1ミリも動かずに固まってたけど、動かなかったんじゃなくて、動けなかったのが本当でしょ、わかるよ、それが拒絶反応だってことぐらい」

やはり、こいつはまだティアナから何も聞かされていない。つまり、ドッキリが終わったとは知らずに。

「それが幼なじみの限界だよ、亮一の限界なんだよ、だって私はニューハーフなんだから、好きになってもらえるはずがない」

幼なじみ、ニューハーフ、そして恋に揺れるキャラを演じながら。

「私じゃダメなんだよ」

涙に声すら震わせてみせて、その実、心の奥底では、獲物が罠にかかるのを手ぐすね引いて待っているのだから。

「亮一にはもっと相応《ふさわ》しい人がいるよ」

情もなにもあったもんじゃない。すでに正体がバレているとも知らずに、いや、知らないからこそその演技なのだろうが。

「ごめん、こんなつもりじゃなかったのに」

これだけ男心をかき乱しておいて、平気でいられるとすれば、そいつは相当の悪女で。

「おまえこそ、勘違いしてるよ」

看過できない、懲らしめてやる必要がある。

「俺だって、おまえをふった憶えはない」

ニューハーフなら確かにふったかもしれないが。

「だっておまえ、どれだけ可愛いかわかってるのか、アイドル級だよ、そんなの相手にしたら、男なら誰だって足がすくむだろ、だから」

あのとき動けなかったのは、あれは拒絶反応ではない。最初から女だと知っていたら、抱きつか

れたからといって怯《ひる》みはしなかったし。

「今だってドキドキしてるけど」

怯むどころか、むしろ、その先の展開を求めていたはずで。

「ずっと前からこうなりたいと思っていた」

背中から包み込むように抱きしめて。

「好きだ」

そう囁いてやると、多少、拒みはしても。

「あ」

「ほら、おまえだって動けないじゃん」

動けるはずもない、下手に抵抗すれば、キャラ設定から外れてドッキリがバレてしまうのだから。

「ほんとだね」

そうやって、おまえは演じ続けるしかない。

「ずっとこうしていたい」

惚れてる男に抱きつかれて感激しきりのニューハーフを。

「このまま、ずっと」

逆ドッキリを仕掛けられているとも知らずに。

■第16話

ニューハーフには男が寄りつかない。その法則は、護符か魔除けのように、実際、昨日までおまえを守ってきた。

好意を持っているフリをしたり、抱きついてきたりと、ギリギリの線まで踏み込むようなマネができたのは、そこに絶対の自信があったからで。

「でもね、亮一には、やっぱり後悔してほしくないの」

おまえの敗因は、その効力を過信したことにある。

「本当に好きな人を選んでほしいの」

そうやって創り上げたキャラ像に、おまえ自身が追い詰められることになろうとは、考えもしまい、まさか、こんなふうに。

「後悔って？」

「あ、ダメ」

好きでもない男に胸を揉みしだかれたら、普通なら通報モノだが、これは、ドッキリの設定上、おまえの想いがやっと通じた相手とのラブシーンのはずだ、このぐらいで騒ぎたてるわけにはいかないだろうし。

「それって、おまえがニューハーフだからってことだよな？」

「え？」

「後悔してほしくないって、言ったろ？」

「うん」

「バカだな」

もはや、ニューハーフの護符には、なんの御利益もない。

「ほら」

胸へのアプローチを続けながら。

「あ、そんな」

耳元から頬にかけて、唇を這わせてやれば。

「ダメ」

その先にキスがあることは、誰であれ、察しがつくだろうが。

「後悔なんてしない、させない」

これはセクハラではなく、ニューハーフとの恋愛に男が前向きであることを示す証拠なのだから。

「俺は本気だよ」

ニューハーフを騙るおまえとしては、甘んじてこの陵辱を受け入れるか、もしくは。

「あ、イヤ、やめて」

そんなに嫌なら、これがドッキリであることを、さっさと白状すればいいものを。

「おまえこそ、後悔してるんじゃないのか？」

「ううん、そういうことじゃ……なくて」

どうするつもりなのか、キスは拒んでも、弄ばれている胸はそのままだ。

「今までにね、男の人に言い寄られたことは、何度もあるの」

そのうえ、妙に落ち着き払って。

「でも、ニューハーフって知ると、みんな、だんだん距離をとるようになって」

「だから俺もそうだった？」

「それは、うん、わからないけど、今度は、好きでもない人が離れていくのとは、違うもの」

なんだか嫌な予感がする、こいつ、まさか。

「私だって本気なんだよ」

まさか、ドッキリを維持したまま、この甚振《いたぶ》りを躲《かわ》す方法があるとでも言うのか。

「だから、ロコちゃん来るまで待ってくれないかな」
「は？」

六子がどうした、どうしてその名が出てくる。

「その上で決めてほしいの」

たしか、以前にも、六子が上京してくるような話をしていたが。

「私が言っちゃうのは、ルール違反だと思うけど、でも」

それが、この件とどう繋がっているのか。

「このままだとフライングになっちゃうから」
「待て」

くそ、なんとなく読めてしまう、この状況で六子、そしてフライングと来れば、こいつは。

「つまり、六子も、俺に気があるってのか」

そう言いたいのだろうが、それは表向きの話に過ぎない、狙いはもっと他にあるはずで。

「おまえ、あいつが綺麗になったって、言ってたよな」
「うん、そうだよ、だから」
「あのなあ」

そんな都合のいい話があつてたまるか。

「何年経ってると思ってんだ、8年だぞ8年」

たしかに六子は将来が楽しみな少女ではあった、今ならばもっと磨きがかかっているに違いないが。

「オレのこと憶えてたってだけでもスゲエのに、そんな綺麗どころが、いまさらオレを好きにな

るとか、マジありえねー、いくらなんでもミラクル過ぎんだろ、それ」

「いまさらって、違うよ、好きだったの、昔から」

「だから、そんなん、ありえるか」

「ありえるよ、私だって」

「あ？」

「私だって、ずっと好きだったんだから」

こいつ、そんな恥かしそうにして。

「そりゃ、おまえ…………おまえはそうかもしれないが」

「ごめん、私はいいの、でも、ロコちゃんの気持ちは、ちゃんと考えてあげてよ」

何を企んでいるのかと思えば。

「亮一にとっても、そのほうがいいよ」

どうあっても、六子の一途をでっちあげるつもりらしい。

恐ろしいヤツだ、よくもそんな途方もないシチュエーションを思いつく。

本来なら、牧島という人間は、幼なじみや従姉妹を裏切るようなマネのできない性質《たち》で。

「なるほどな」

六子がやって来る前に、抜け駆けして幼なじみを寝取るなんてことは、もちろんできない、いわゆる良い子。

まして、ニューハーフである自分が、歴とした女性である六子をさしおいて恋人の座につこうなんて、もってのほか、畏れおおい。

そういうキャラに徹して、つつましく、いじましく振る舞おうとするならば、ここは。

「せめて二人をちゃんと比較したうえで俺に選んでほしい…………と、そういうわけか」

「うん」

「だから、今は待ってほしいと」

「うん」

それは、男にセックスを諦めさせるには十分な理屈と言えて。

「素晴らしいね」

そして、なにより、ドッキリの体裁を崩していない。

「まあ、それが利口だな、六子にギャーギャー言われても困るだろうし、俺にしたって、後になって、ああ、やっぱり女のほうが良かった、とか言い出しかねないし」

「どうして、そんなイヤな言い方するの」

「ハッ、褒めてんだろうが」

ここまで追い詰めておきながら。

「結局、六子を待つしかないってんだからな」

よく出来ている、実によく出来ている、見事と言うほかない。

「最終的に、二人に言い寄られて有頂天になったところを、俺は、ズドンと落とされるって寸法か」

「え？」

この期に及んで、まさか、そんな奇策をブチ込んでくるとは。

「感服するよ、演技もすごいが、発想もまた素晴らしい、脚本の才能もあるんじゃないか」

「もう、なに言ってるの？」

「ここで終幕なのが残念なくらいだ、ハハ」

かくなる上は最終兵器を使うしかない。

「ワケわかんないよ」

疎かになっていた両手を、改めて二つのふくらみにあてがい。

「バーカ、ネタはあがってんだよ」

ただ揉むだけでは足りない、今度は激しく揺さぶって、そして。

「おまえ本当は」

声は、もっと低く、もっと早口にしたほうがいい。

「本当は女だろ」

やむない幕引きとなり、じっくり女体を楽しむことができなかつたのは残念だが。

「ハハハ」

まあ、とりあえず、逆ドッキリ大成功ってことで。

「どうだ」

なんとか言ってみろ。

■第17話

もはや、観念して謝る以外、選択肢はないと思うが。

「途中、なんだかイミフだったけど、ロコちゃんのことので気を遣ってくれてるんなら、ごめん、それじゃこの問題は解決しないから」

白いワンピースは、むしろ子供を諭すような口調で。

「突き詰めれば、やっぱり私は女性とは言えないし」

驚くしかない、胸を弄《いじ》くり倒しているのが恥ずかしくなってくるほどに。

「おまえ、ほん……とに」

「え？」

「なんだろうな、この無力感は」

理解の範囲を超えている、すでに真相を知られている相手に、なおも嘘をつこうとするのだから。

「手に負えねー」

「ごめん、だって、亮一の言ってること、よくわかんないし」

アホか、解らないのは、おまえの精神構造のほうで。

「こっちはなあ、牧島から事の成り行きやらなんやら、もう全部聞かされてんの」

「私からって、え、うん、そりゃ全部話したけど」

「おまえじゃねーよ、本物のほうだよ」

「本物？」

ネタバレして価値を失ったドッキリを。

「本物ってどういうこと？」

「あー、もう、いい加減にしろって」

そうまでして続けることに、どれほどの意味があるのか。

「まったく理解できねー」

怖いもの知らずと言うか、なんと言うか、ただでさえ、こうして。

「あっ」

エロ攻撃にさらされているというのに。

「もう、亮一こそ、意味わかんないよ」

「言ってる」

ここでさらに、ワンピースをまくり上げて。

「あ、ダメ」

ショーツの上からでも、陰部を髭《なぶ》ってやれば。

「やめて」

女は感じないではいられまい、そして。

「おら、チンチンはどこいった、チンチンは」

「いやっ」

「ニューハーフなら、あるはずだろーが」

「バカ」

馬鹿はおまえだ、このまま意地を張り続ければ、結果、どうなるか判りそうなものを。

「こっちは、最後までやったっていいんだぞ」

「だから、性転換したんだもん、あるわけないでしょ」

「じゃあ、コレはなんだよ」

「あっ」

「チンチンなくて、女のソレが付いてりゃあ、もう言い逃れのしようがねーだろ」

「違うよ、手術さえすれば、ほぼ女の子と同じになるんだよ」

まったく往生際の悪い。

「あのなあ、こっちは、いい加減にしないと姦っちまうって言ってんだぞ」

あるいはこちらにその勇気がないと、タカを括っているのかもしれないが。

「だって本当だもん、今の技術はそれぐらい進んでるの」

「だから、クリや膣もあるってか」

「そうだよ」

「ほうほう、なるほどな、そりゃすげえ、だったら、普通にエッチもできるってことだよな？」

「そうだよ」

「じゃあ問題ないな、やろーぜ」

「あっ、だから、それはダメ、口コちゃんが」

「ハハ、懲りねえな、まだ言うか」

ならば、思い知るがいい。

「え？」

女の華奢な体は、男の腕力になす術もなく。

「やっ」

崩れ落ちる。

「うう」

そのはずが……何が起きたのか。

「いてえ」

目の前が暗転したと思ったら、次の瞬間には、床が見えて。

「あにすんだ」

「何かしようとしたのは、亮一でしょ」

どうやら、床に倒されて、そのうえ、背中で腕をロックされているらしく。

「ぬう」

まったく動けない。

「無駄だよ、亮一、忘れちゃったの？」

「あ？」

「体力勝負で、私に勝ったことないでしょ」

それは、どこかで聞いたセリフで。

「フッ、それで、自分が本物だとでも言うつもりか」

「だから、もう、なんなの、その本物って、私がニューハーフだから女としては偽者だって言いたいのかな」

「フハハ」

「そのわりにはさ、私がニューハーフじゃないみたいに言うし、手術のことも信じてなさそうだし、まるで私が」

「おまえ、ほんと、わかんねーな、もうバレバレだったのに、しつこくそんな猿芝居を続けてさ、それでおまえになんの得があるってんだ」

「わかんないのはこっちだよ、芝居とかさ、さっきも演技がどうとか言ってたけど、どういうことなのか、もっとちゃんと話してよ」

「アホか、何もかも知ってるヤツに、なんでちゃんと話さにゃならんのだ」

まったく、釈迦に説法と言うか、暖簾に腕押しと言うか。

「ハハ、ハハハハハ」

うまい喩《たとえ》が見つからないほど馬鹿馬鹿しい。

「知らないから聞いてるってゆうのに、もう」

「いで」

「それじゃ埒があかないでしょ」

「いででで」

それはこっちのセリフだと言い返してやりたいところだが、引っ張られた腱の痛みが緩んでいく途中。

「あ？」

ドアが開くような音がしたのは。

「え……と」

幻聴ではなかったらしい……馬乗りになっている白いワンピが、おそらく振り返ったであろうその方向からは、外の雑踏と、玄関に踏み入ったに違いない、コツコツという、ヒールの音が聞こえ、そして。

「誰か来たみたいよ」

そしてドアが閉まり、静寂が戻ると。

「あがらせてもらうよ」

その声は、あのホニャラ塚で聞くような、張りのあるトーンで。

■第18話

ここからは……玄関が見えないから、確認こそできないが。

「な、私の言った通りだったろ？」

間違いない、この声の主は。

「それにしても無様な格好だな」

神社で会ったときの衣装のままであれば、そこには、オスカルと呼べばアンドレと返ってきそうな出で立ちの、牧島が立っているはずで。

「ティアナの仕業だったんだね」

「ああ」

本物を前にして、偽者がどう醜態をさらすのか、これはちょっとした見物だ。

「亮一の態度がおかしいから、その理由を、ずっと考えてた」

「けっきょく彼は、セックスのことしか考えてない」

「亮一に、なにしたの」

「エサをくれてやった」

「ひどい」

「そしたら見事に食いついたってわけ」

「ひどいよ」

ただそれは、予想していたシーンとは、ほど遠く。

「私が女だってことになってるの？」

「そうだ」

「どうして」

その声だけではなく、背中を制している重みのそこかしこから、ワンピースの感情が、震えとなって伝わってくる。

「どうして、こんなことするの」

「彼には、私が牧島悠で、君は牧島悠のフリをした、ドッキリの仕掛人だと伝えておいた」

「答えてよ」

「そのほうが、君のためだ」

「放っておいても、亮一はロコちゃんを選んだよ、それでいいじゃない、なんでこんな、こんな」

「それで君は、本当に割り切れるの？」

「最初から、そのつもりで来てるんだよ、私は」

「それはおかしい」

「おかしくない」

「だったら君は、彼に会う必要すらなかった、ロコの上京をただ黙って見届けるだけでよかったはずで」

「いっ」

いっそう強く床に押しつけられて。

「最後に、会いたかったの」

鈍い痛みが走ったが、それが薄れていくのと同時に、背中から、重さとぬくもりが消え去って。

「それぐらい、いいじゃない」

声もまた、遠ざかっていくが。

「最後ではなくなったから、こうしてるんだろ」

しびれが酷く、腕に力が入らない。離れていく気配は、あきらかに玄関へと向かっているのに。

「おい」

早くもドアノブを回す音が聞こえる。

「待て」

やっとのことで体を起こしてみれば、ワンピースの姿は、すでにそこにはなく。

「大丈夫です」

去っていく靴音が、閉まろうとするドアに遮られて。

「心配しなくても、あの子はもう、お店に帰るしかありませんから」

馬鹿な、このままでは逃げられてしまうというのに。

「なにが大丈夫なんだよ」

よくもそんなボケをかませる。

「謝罪させるんじゃないのかよ」

そういう話だったからこの場を任せたのに、二人で不可解な会話を繰り広げたあげく、まるで、あいつのドッキリが、実はドッキリではなく。

「まだ、わからないんですか」

こいつが神社で言っていたこと、それこそが嘘で、ドッキリで。

「やっぱりあいつが牧島悠だったか」

「ええ、そうです」

話の内容からすれば、そういう筋書きだろうと予想はしていた、しかし。

「そんなことは、ありえねー」

あいつは女だ、調べはついている、あいつの体に直接聞いたのだから、それ以上の証拠はないはずで。

「瀬良さんは、誤解してますよ」

こいつだって、いや、こいつこそが、この状況へと導いた張本人だと言うのに。

「ちょっとコレ、お借りします」

何をするつもりなのか、不意に、テーブルにあったケータイを拾い上げると。

「あ？」

見る間にカバーを外し、バッテリーを取り出して。

「ご覧になれますか？」

そして、なにやらメカメカしい部分を指差して見せたが。

「これには盗聴器が仕掛けてあったんです」

「は？」

「これで、二人の会話をずっと聞いていました」

こいつ……………今、なにかもの凄く大それたことを口走ったに違いないのに。

「性別適合手術は、瀬良さんが思っているような、粗末なものではありませんよ」

その顔は、やけに自信に満ちていて。

■第19話

盗聴なんて犯罪行為を自供しておいて、とくに恐縮するでもなく、むしろ勝ち誇ったような顔をしている……その態度にも大いに納得がいかないが、それ以上に。

「現在の技術はかなり進んでいて、外性器の形成や、造脛も可能になっています」

神社では、あいつをノーマルな女だと、ハッキリ証言していたではないか、それを半日と経たないうちに翻して。

「ですから、じかに身体に触れて、性器の形状を確かめたからといって、あの子が女性だという証拠にはなりません」

そんな御託まで並べて事態を覆そうとするのは何故だ、こいつの意図が見えない。

「証拠？」

「あの子の場合、性器の形状から性別を判定することはできないと、そう申し上げているんです」

「そんな都合のいい話があったまるか」

「あるんです、ネットでもなんでも調べてみてください、性別適合手術でググれば、体験談が山ほどヒットしますから」

「じゃあなにか、ほんの少し前、俺が触ったのは、まさにその手術で作り上げた性器だったのか」

「そうです」

「馬鹿馬鹿しい、誰が信じるんだよ、そんなの、ドッキリを尤もらしくするためのハッタリにしか聞こえねえ」

「ですから、ネットで調べてください、まずはそこを理解していただかないと、話が先に進みません」

わからない……こいつのこの強気はなんだ……マジにネットで明らかになると言っているのか……だったら、パソコンは昨日メールを見たまま消してない、すぐにでも調べられるが。

「わかった、性別……なんだっけ？」

「性別適合手術です、見た目というキーワードも加えてください」

リクエスト通りに打ち込むと。

『術後、見た目はどうなるんですか？』

トップにQ & Aサイトがヒットして。

「見た目は女性とほとんど変わらないと書いてありませんか？」

リンク先には、確かにそれらしい文言が連《つら》なっているが。

「じゃあ、やっぱりあいつは男だったのかよ」

「瀬良さん、さっきも申し上げたじゃないですか、あの子の場合、性器で性別を判定することはできないって」

「だから、要約すれば、男ってことじゃねーか」

「DNA鑑定をすれば、性染色体がXYと出て、生物学的に男性と分類することができるでしょうけど、これは、そういう次元の話ではないんです、考えてみてください、どうして私がこんな回りくどいことをしているのか」

「いや、だから」

何を言ってやがる、こいつ、そんなことはとっくに考えている、あいつを女だと言っておきながら、それを180度ひっくり返す、そこにどんな意図があるのか、これまでの会話はそれを探るためにあったと言ってもいいくらいで。

「ワケわかんねーんだよ、おまえが言ってることは、矛盾だらけでさ」

「最初、あの子がニューハーフをカミングアウトしたとき、瀬良さんは、それを信じましたよね」

「はあ？」

「そして、今度は私があの子を女性だと伝えたと、やはりそれを信じて、犯行に及んだ」

「犯行って、なんだよ、人聞きの悪い」

「強姦については、この際、追求しませんが」

「ご……強姦かよ」

「私がお聞きしたいのは、どうして瀬良さんが、男か女か、性別を判定しないと気が済まないのか、その動機についてです」

「そ」

それは、当たりまえのことだ、男か女か判らなければ。

「セックスができないからですか？」

「いや」

もちろん、セックスもその一部だが。

「恋愛ができないからだろ」

誰しも、その大前提のために性別を知ろうとするのであって。

「それが、なんだってんだよ」

「どうして性別を知らないで恋愛できないのですか？」

「あ？」

「聞き方を変えましょう、恋愛の条件に、性別は必須ですか？」

「ああ、そりゃそうだろう」

「人柄や心よりも、ですか？」

「そうは言ってねー」

「では、心と性別、どちらが重要ですか？」

「それは」

「心ですか？」

「いや、まで」

「教えてください、心さえ良ければ、性別は、女でも男でも、どっちでもいいですか？」

「そんな極端な話じゃねーだろ」

「極端ですよ、瀬良さん、あなたは、あの子をニューハーフだと思っていたころは、手を出さなかった、いいえ、出せなかった、ファミレスの帰り、あの子に抱きつかれて、微動だにできなかったほどに」

「いや」

違う、あのときは、ただ、あいつを傷つketくなかっただけで、手を出すとか出さないとか、そんな話ではなく。

「それが、どうしてですか、さっきは、あの子を慰みものにしようとして」

「いや、だからそれは、おまえが」

「そうです、私があの子を女の子だと申しあげたからです、何故ですか、女の子だと知らされた途端、どうして手を出したんですか」

「なんだよ、それ」

「性別こそが、その判断材料になっていたんじゃないですか？」

違う、違う、それはおかしい、どこかに論理矛盾がある。

「瀬良さんの行為は、女性だったら合格、そうでなければ不合格と、そう仰ったも同然なんですよ」

馬鹿な、あいつの局部を触ったのは、ドッキリへの制裁のつもりだったし、仮に女だからという理由で触ったとしても、それは。

「それは、セックスの対象になるかどうかであって、恋愛できるかどうかとは、別問題だろ」

「なら、セックスできない相手と恋愛できるんですか？」

「あ？」

「プラトニックで、満足できるんですか？」

何を言い出すのか、こいつ……そんなこと。

「無理でしょう、だったら同じことですよ」

たしかに、そうなのかもしれないが、しかし。

「私はなにも、性欲を咎めたいわけではありません」

ダメだ、このまま黙っていたら、こいつの理屈を認めることになってしまう。

「そういう次元を超越しなければ、あの子を受けとめる資格はないということを、瀬良さんには知っておいてほしいのです」

そして、認めてしまったら、あいつはやはり牧島悠で、やはりニューハーフということになり。

「半端な覚悟では、かえってあの子が傷つきます」

ついさっきまで背中感じていたあの震えが、嘘や演技ではなく、あいつの真実を伝えていたとしたら。

「じゃあ、俺は、どうすりゃ」

「明日、お店に来てください」

それが答えだと言わんばかりに、ティアナは背を向けたが。

「お店？」

ここまで事態をひっかき回してきた者が。

「ねねねのことです」

今なお、聞きなれた店の名を嘯いて、こちらのテリトリーに踏み込んでくるというのに。

「どういうことだよ」

「来ればわかります」

こいつが何を考え、何をしようとしているのか、いまだ推測すらできずにいる。

■第20話

『そういう次元を超越しなければ、あの子を受けとめる資格はない』

ティアナの言う資格というのは、ようするに、牧島《あいつ》の性別を受け入れろという意味なのだろうが。

指先の記憶が、それを拒んでいる。

あれから一夜が明けて、さらに数時間が経つというのに。

あいつの陰部のぬくもりが、まだ残っているような気がして、ともすれば、鼻に近づけて、その香《かぐわ》しさを確かめたくなる。

「ちょっと、こんなところで何やってんのよ」

あいつをニューハーフだなんて思えない、思いたくない、できれば女であってほしいが。

「あんまり遅いから迎えに来ちゃったでしょ」

ねねねに行けば、ティアナと牧島がいて、会話やらなんやら、二人の日常を否応なく見せつけられて、その過程でニューハーフを既成化されてしまいそうな気がする。

「そしたら、アパートにはいないし、ケータイにも出ない、一体、私にどうしろと」

なのに、目前で立ち止まったミュールが、誰に話しかけているのかは明らかで。

「たまたま見つかったからいいようなものの」

どうやら、オスカルは猶予をくれないらしい。

「こっちにだって都合ってもんがあるんだからね」

いや、こいつ……『迎えに来た』、なんて言うから、てっきりティアナかと思ったが。

「えっと、なんすか？」

「3時に病院なの、予約入れてんの」

そういえば口調がホニャラ塚していないし。

「帰って支度もしなきゃなんないの」

ファッションもモダンで、白のキュロットに、パステルオレンジのサマーセーターを合わせ。

「これで間に合わなかったら、どうしてくれんのよ」

ヘアスタイルは、ボブの毛先をワンカールしてあるだけ……18世紀のフランスのそれとはまるで違う。

「ほら立って」

手を引っ張ろうとする、その面立ちは、けっこうな美形だが。

「だいたい公園のベンチってのはリストラ組の特等席でしょ」

やはり見覚えがない……黒目がちの、あひる口で、ティアナとも牧島ともタイプが違う。

「アンタにはちゃんとねねねの席が用意されてんじゃん」

それでも、このワンカールボブが、ティアナや牧島の関係者なのは、その口からねねねの名が出てきたことから、ほぼ間違いなく。

「言っときますけど、俺は、ねねねには行きませんよ」

腰が少し浮きかけたところを、危うく踏みとどまると。

「ふうん」

バランスを崩したのか、ボブは、こちらに倒れかかって。

「私は、別にかまわないけど」

いや、倒れると見せかけて、その反動を使い。

「アンタは、本当にそれでいいの？」

反りかえるように引っ張る。そこまでされたら、こちらも立つより他にないが。

「このまま放っておくと、恐ろしい目にあうよ」

「恐ろしい？」

「そう、目を覆いたくなるほどのね」

「はあ」

無理やり人を立たせておいて、何をしたいのかと思えば、こいつら、まったく、どうかしてる。

「あのねえ」

盗聴とか、ティアナの行い一つ取っても常軌を逸しているというのに、こうして新たな人間を投入してきて。

「組織ぐるみって、おたくら、おかしくないすか？」

おまけに恐ろしい目に遭うなどと言って恫喝までして、もはや一介の恋愛に口を挟むというレベルではない、度を越している。

「風雅さんに、ね」

「はあ？」

「彼女に取り入るのに、適当な糸口はないかと、最初はさ、ねねねのイメチェンを持ちかけたんだよね、私」

そして今度はなんの話かと思えば、その苗字は、明らかに。

「マス……風雅が、なんだって言うんすか」

「そう、マスター、彼女、まるで相手にしてくれなかったからね、あのときは」

「だから、どういうことですか、それ」

「カウンターでさ、ちょうど私が、風雅さんに珈琲の淹れ方を説明した後だったかな」

なんだか、妙な感覚がする、これって。

「アンタは、私の隣でさ」

いや、スリーセブンとは違う、ビンゴでもない。

「不服そうな顔で聞いてたよね」

欠けていたパズルのピースが埋まったとでも言おうか。

「やっと、わかった？」

うまい喩えが見つからないが、とにかく昨日、ティアナが去り際に行った措置と、そこに覚えた違和感は。

「わかんないの？」

ここに繋がっていたのかもしれない。牧島の扱いを云々しようというのに、どうして日を改めたのか、どうしてねねねを指定したのか。

「じゃあさ、これはどう」

牧島以外のことには考えが向かなかったから。

「なんだか、お二人、ウフフな感じですよ？」

マスターやねねねが巻き込まれているとは夢にも思わなかったし、ましてや。

「これでも、わかんない？」

こいつの正体なんて、知る由もなかったが。

「しょうがない、大ヒント」

「アンタだったのか」

「ちょっと、まだ言わないでよ、これ外してんだから」

今さらヒントでもあるまいに、両手でパチパチやり始めた、そのワンカールボブは、つまりウィッグかなにかであり、取り外したら、言うまでもなく、あの、お馴染みのヘアースタイルが現れて。

「う……………」

「なによ」

いや、現れはしたが、蒸れてしまったのか、茶髪くんは、まるでヤル気がないようで。

「まさか、忘れちゃったわけじゃないでしょうね」

面白い……………これはこれで収穫だった。あの威圧的なツンツン頭さえなければ、こいつも普通の女で。

「ちょっと？」

「ああ、もちろん、憶えてますよ」

以前、ねねねでは不覚を取ったが。

「村野さんでしたよね」

今日は勝てそうな気がする……………というより、負けるわけにはいかない。

第21～24話はこちら ⇒ <http://p.booklog.jp/book/77934/read>